

# 大槌町の復興における各地区空間計画 —大槌デザイン会議の試み—

中井 祐<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻  
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail : yu@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

本稿は、東日本大震災で甚大な津波被害を被った岩手県上閉伊郡大槌町の復興事業の経過について、集落の空間計画の観点から、2013年度に運営された「大槌デザイン会議」の概略を報告するものである。

**キーワード:**東日本大震災, 復興計画, 岩手県大槌町, 空間計画, 公共空間

## 1. はじめに

### (1) 岩手県大槌町の復興計画の経緯の概略

筆者は、2011年3月11日に発生した東日本大震災により甚大な津波被害を受けた岩手県上閉伊郡大槌町の復興計画について、外部の専門家として、とくに空間計画やインフラ整備の方向性にたいする助言や技術的支援を継続してきた。

その経緯の概略は以下のとおりである。

2011年度：復興パターンの検討、復興基本計画の策定の支援<sup>1)</sup>

2012年度：空間計画の基礎的検討、また基盤整備の事業化（都市計画決定や大臣認定）に際して必要な技術的検討および助言

2013年度：被災した全地区の具体的空間計画（主に公共空間と公共施設）の方向性の検討

本稿では、2013年度に手がけた全地区の空間計画の検討経緯について、概略を報告する。

### (2) 空間計画に際しての課題

大槌町は2012年度に、前年度に住民主体で策定した基本計画をもとに、区画整理の事業区域や幹線道路の都市計画決定、防災集団移転事業の大臣認定等を進めてきた。2013年度は各地区の空間計画の具体化・事業化の段階であるが、大槌町のすべての地区（町方、寺野、小枕・伸松、沢山、安渡、赤浜、吉里吉里、浪板）の公共施設やインフラの設計施工を役場が自ら運営することは、技術者が不足し、かつ業務のほとんどを任期付の応援職員に頼っている状況では不可能であった。

そこで町は、各地区的コンストラクション・マネジメントを外部に委託する方法をとった。たとえば町方・寺野をUR都市機構に、沢山を岩手県土地開発公社に、それ以外のCMを日本工営グループ（事業調整）と前田建設工業JV（設計施工）に、という具合である。

このとき課題となるのは、事業の主体が多岐にわたる場合に、基盤整備の質、とくに区画整理や団地造成、公共施設の配置、街路・広場・公園等の具体的設計を、景観あるいは空間デザインの質の観点から、どのようにしてコントロールするか、という点である。

通常、以下のふたつの方法が考えられる。

- ・景観形成指針、デザインガイドラインの類を作成してコントロールする
- ・個々の設計の質をチェックする機能を有する委員会を設置する

しかし、デザインガイドラインの類は、策定するための期間が相応に必要であるだけでなく、それを現場で的確に運用する権限を付与された主体が存在しなければ画餅に過ぎない。また、委員会が一元的に個々の設計をチェックするには、設計対象があまりに膨大かつ多岐にわたり、それをさばくマンパワーも不足していた。

大槌町は、2011年度の基本計画の策定以来、集落毎に役場職員、コンサルタント、コーディネータ（学識経験者）がユニットを組み、地区単位で種々の問題を検討する体制をとってきた。また、町長の方針により、可能な限り地区住民が主体的に議論する場を設け、その成果を復興計画に反映させていくという姿勢を強く打ち出してきた。どのようにして具体的空間計画と個々の設計内容のコントロールを図るべきか、当初は、府内の調整会議をたちあげてデザインガイドラインを作成する方向で検討をはじめたが、議論の結果、これまで同様、集落毎に

役場・コンサルタント・学識経験者がユニットを組み、地区住民主体の議論を重ねることによってまとめていく、という方針をとることとなり、そのフレームとして「大槌デザイン会議」の設置が決定した。

## 2. 大槌デザイン会議

### (1) 大槌デザイン会議の設置

大槌デザイン会議は、各地区別のワーキング（WG）と、各地区WGの代表及び学識経験者からなる全体会議、という建てつけである。学識の委員は、筆者、乾久美子（東京芸術大学・建築）、大月敏雄（東京大学・建築）の三名で、筆者が全体の座長を務めた。

各地区WGの委員は、地区住民のみで構成され（公募、各地区からの推薦、行政からの推薦で選定。委員に行政関係者は含まない）、彼らの議論を学識経験者がコーディネートする。地区ごとにコンサルタントがファシリテータとしてはりつくとともに、議論のために必要な資料提供と技術的検討を行い、行政は議論のテーブルを周囲で見守るとともに質問があれば適宜答える、というスタイルである。

各地区のコーディネータは以下の通り。

町方：福島秀哉（東京大学・土木）

小泉秀樹（東京大学・都市計画）

沢山：福島秀哉（東京大学・土木）

安渡：尾崎信（東京大学・土木）

小枕・伸松：尾崎信（東京大学・土木）

赤浜：窪田亜矢、黒瀬武史（東京大学・都市計画）

吉里吉里：二井昭佳（国士館大学・土木）

浪板：二井昭佳（国士館大学・土木）

また、地区別議論のファシリテート及び技術的検討を担当したコンサルティングチームは以下からなる。

東京建設コンサルタント、日本測地設計、邑計画事務所、小野寺康都市設計事務所、EAU、田中雅之建築設計事務所、喜多裕建築設計事務所、木内俊克（東京大学・建築）

### (2) デザイン会議のミッション

大槌デザイン会議設置要綱より、関連する箇所を抜粋して、以下に示す。

（設置）第1条 復興基本計画に示された町の将来像の実現へ向けた復興まちづくり事業における、公共施設・公共空間の計画・設計の調整を行うとともに、町並みの

誘導方策の考え方を整理するため、大槌デザイン会議を設置する。とくに公共施設・公共空間については、各事業を進めながら、全体として、復興基本計画に示された町の将来像の実現に向けて復興まちづくり事業との整合を図る。

（所掌事項）第2条 大槌デザイン会議は、公共施設・公共空間の計画・設計内容等事務局が提示する資料に対して、計画・設計の質を空間面や景観形成の面から確認・調整・助言等を行う。

- 2 公共施設・公共空間デザイン方針をとりまとめる。
- 3 景観形成ガイドラインを検討し、全町の景観計画としてとりまとめる。

### (3) 経緯

大槌デザイン会議（全体）は、2013年3月14日の第一回を皮切りに、翌2014年3月にかけて、計6回開催された。地区別WGは、それぞれ5~6回開催され、さらに地区住民を対象にした個々のワークショップ（公園の計画や公民館の検討など）を含めると、関連する住民会議はのべ72回に及んだ。

## 3. 成果としての「大槌デザインノート」

大槌デザイン会議の議論は、次のように進められた。

第一回：会議の目的意識の共有

第二回：空間計画の目標の提示（「身のまわりを歩いて生活できる町」）

第三回：遠野の景観整備の事例を委員有志で見学

第四・五回：地区別WGの議論の状況を共有

第六回：最終とりまとめ

全体会議は各地区の議論を共有する場としての役割に徹しており、実質的な議論の主体は地区WGである。前述の地区担当コーディネータには、議論のなかで地区住民の価値観をていねいに読みとりながら多様な意見を編集し、そこに潜んでいる断片的な空間のイメージを相互に関係づけ、それを専門家として構想している空間イメージに統合しながら、地区全体の空間計画を提示して住民合意をはかっていく、という役割が求められた。

議論の成果は、「大槌デザインノート」としてとりまとめられた。町方の例を図1に示す。紙面の大半は、空間のイメージを示す図面やスケッチと、その根拠となる多くの住民意見で構成されている。

最終とりまとめの段階で、全地区に共通する公共空間・施設のデザイン方針を以下のようにまとめた。

全地区に共通する公共空間・施設のデザイン方針：

・基盤整備を進めていくうえで、以下の三点を、今後の各地区のまちづくり及び景観形成の要に位置づけ、設計の質に反映させる。

- 1) 歩きたくなる町を実現するうえで重要な公共空間・施設（歩行空間ネットワークの要所）
  - 2) 地区住民の日常的な居場所となる公共空間・施設（ご近所や町内など身近なコミュニティで共用する空間）
  - 3) 町全体／各地区の自然・歴史伝統・生活文化・住民の価値観・復興への思いを象徴もしくは代表する場所や施設（各地区ごとに設定）
- ・個々の設計（デザイン）については、ワークショップなどを通じて地区住民とコミュニケーションを図りながら、その内容と質を検討する。

注： 1) 2) の例：道、広場、公園、集会施設、にぎわいの創出が求められる街区など。とくに、日常的に住民の居場所となり、かつ非常時に避難上の目印もしくは拠点となる場所は、最重要。3) の例：歴史的な道筋、海が眺められる道、湧水のある広場・・・など。詳細は各地区デザインノートに記述。

#### 4. おわりに

デザインノートを作成する過程で興味深く感じたのは、地区ごと集落ごとに、その成果や意思決定の過程がそれぞれ個性的だということ、しかし地区間でその成果におおきな齟齬や矛盾は生じないということ、またワークショップなどで住民がテーブルをかこむとき、昔ながらのちいさなコミュニティ単位でおこなうと、個々人が行政にたいして要望や意見をつきつけるような個人対行政という対立的構図がうすくなり、議論がスムースに進む傾向が見られる、ということである。

大槌デザイン会議は、試行錯誤を重ねながら、結果的に、ちいさな地縁的な単位（近隣）の議論を積み上げて地区全体の空間像に統合するという方法になった。現在、このデザインノートを根拠に、各地区における個々の空間設計をそれぞれ進めている段階である。

#### 参考文献

- 1) 中井祐「岩手県上閉伊郡大槌町の復興計画について」景観・デザイン研究講演集No. 8, pp. 249–252, 2012. 12を参照

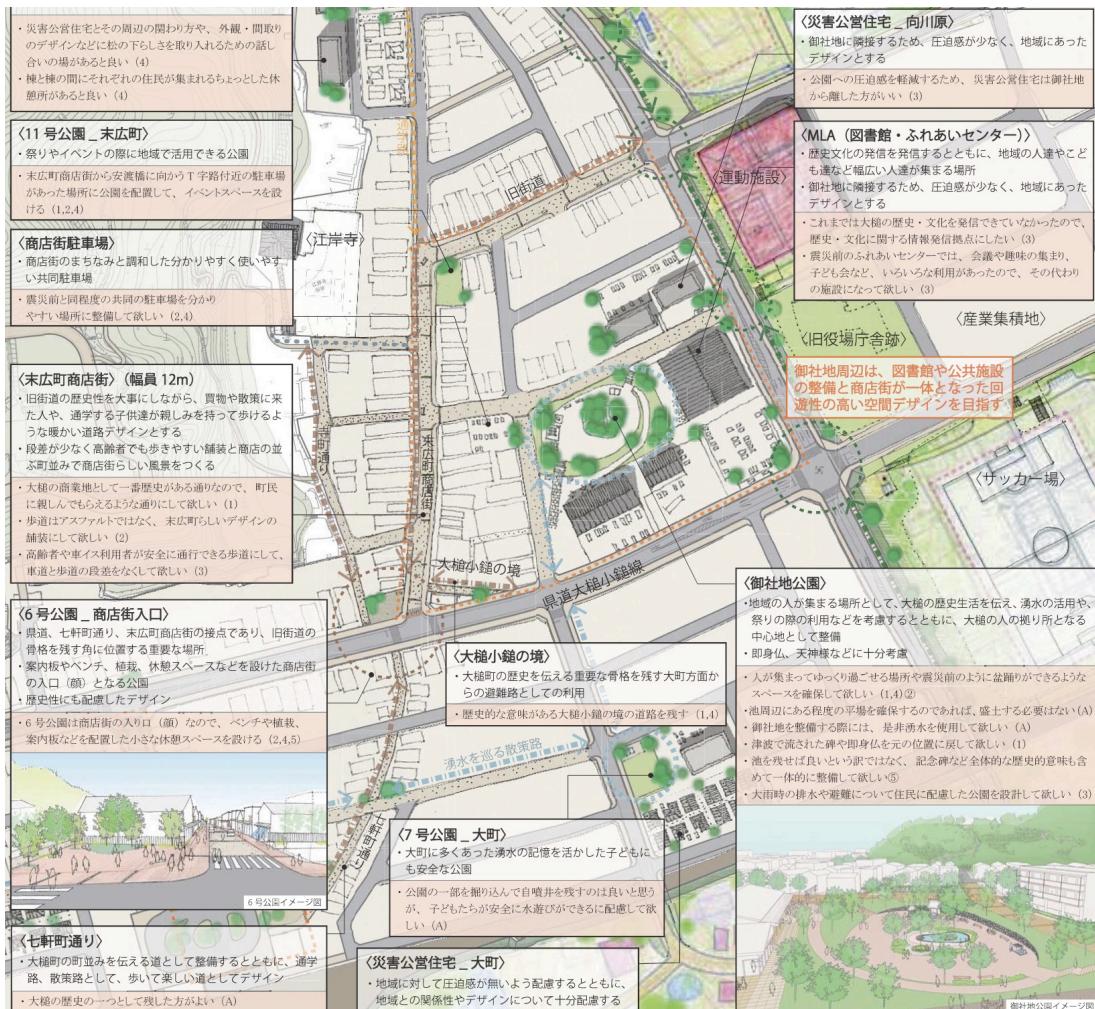


図-1 町方の公共空間のデザイン方針（「大槌デザインノート」未定稿, p. 5 より抜粋）